

未来を創る！次代に繋げるまちづくりセミナー 概要（後半）

日時：令和3年2月19日（金）13:30～16:30

場所：J:COM ホルトホール大分 小ホール

★★第2部★★ パネルディスカッション

○河野 忍氏（株式会社モアモスト 取締役）

私は1986年生まれ、現在35歳になりました。4歳児の子を持つシングルマザーです。父が豊後高田出身で母が姫島村出身で、将来の夢は姫島村の村長になることです。もともと小学校4年生ぐらいの時からホームページを作るぐらいのオタクっぷりで、リアルにはお友達はいないけれどもインターネット上にお友達がいっぱいいるみたいな感じの、小学校・中学校ぐらいからオフ会に参加したりってというような感じで、かっこよく言うと時代の申し子みたいな感じだったのかなぁと思います。IT系で仕事を始めて今だいたい17年ぐらいです。



私は大分出身なんですけれども、高校を卒業してから福岡・東京・福岡・大分って、きれいにUターンをして帰ってきていまして、東京の方でat homeさんとかallaboutさんだったりとか、そういったところのシステム開発や広告運用といったところを担っておりま

した。10年前福岡市の方にUターンして帰ってきたときに会社を起こしまして、その1年後に会社ごと大分市の方へUターンして帰ってまいりました。会社はホームページを作ったりとか、最近だと大分県庁の「The おおいた」さんっていうサイトとかを作らせてい

ただいています。ホームページをただ作るというよりは、どこかのキャッチコピーみたいで申し訳ないですけど、結果にコミットしていくっていうのはすごく自分の中のテーマで、こちらもリニューアルしてからほしい 20%ぐらい閲覧数も伸びたりとかですね、どれぐらいの人に見てもらって何をしてもらいたいのかっていうところを意識しています。

ただホームページの制作はじゃあ業務の中でも 3 割程度で、ほとんどが web システムの開発で、皆さんのお目にかかるようなことが実はあまりなく。西日本全体で今 240 施設ぐらいの CMS、ホームページの裏側みたいなのを作らせていただいてまして、商業施設さんなので、皆さん大分だと想像つくところていくとパークプレイスさんとか、パークプレイスさんはちなみに作ってないんですけども、そういう大型のモールさんの CMS とかかっていうのを作らせていただいてます。商業施設と商店街って作りが結構似ているので、彼らの集客の部分とかかっていうのを商店街に落とし込めないかなっていうふうに思っているのが私の野望です。

まちを遊び場にしたい

去年の 4 月ぐらい、コロナ期間中に飲食店さんとかがなかなか集客が難しいっていった時期がありまして、その頃に「飲食店を勝手に応援するグループ」というのを Facebook 上で立ち上げて、ここは皆さんの飲食店に行ってきたっていうのを、ウォールは書きづらいからグループだったら投稿していいよね、みたいな感じのゆるいグループを作ったんですが、ピークタイムの時はもう 1 日あたり 4,000 投稿ぐらい、4,000 人が結構アクティブに動いていて、平均的にも 1 日に 50 投稿ぐらいあるかなっていう、どっちかと言うといいコミュニティができてたなあと思います。Facebook って情報が流れていくサービスなので、それらをまとめてウェブサイトにしてしまおうと思って作ったのが「#大分コロナ SOS」っていうサイトでした。未だに「#大分コロナ SOS」は、コロナが落ち着いたって言われたり第二波、第三波と言われたりとかしてるんですけども、閲覧数自体がそんなに落ちてなくて、大分の情報がこんなに見られてるんだなっていうふうに思ったので、いっしょにしっかりとウェブメディアとして大分県内の情報をしっかりとインターネット上に上げていこうっていうのを実現したいなあと思って、今春、4 月 1 日ぐらいにオープンできたらなあと思っているんですけども、「Little Oita」という Web メディアにラッピング

し直してオープンする予定であります。私がUターンなんですけれども、東京にいたときに本当は福岡に寄るつもりはなくストレートに大分に帰ってきたかったですけれども、大分って仕事がないイメージがすごくあって。でも帰ってきてみると仕事がいっぱいあって、みんな人が足りないって言ってるんですね。このギャップってなんだろうと思ったら情報がしっかりと届いていない。ホームページどころか記事にもなっていない、インターネットで探してもその従業員がどれくらいいるのかとか雰囲気すらわからないみたいな状態だったので、それらを全部インターネット上であげていきたいなっていうのが、9~10年前大分に帰ってきた時の野望でもあったので、満を持してじゃないですけど、こんなにPVあるんだ、需要あるんだっていうのにコロナのおかげで気づけたので、形にしていきたいなというふうに思っています。「Little Oita」は、Little Tokyo とかってニューヨークの方で言われたりするんですけども、小東京とか第二の東京みたいな感じの言われ方をするので、第二の大分として大分県内の情報すべてがここに載ってくるような状態になったらいいなあとというふうに思っています。スマホだとこんな感じですね。まだデザインしかないので一応お見せしておきます。

趣味といいますか、私は大分出身ながら18で大分を出ているので、地元のことをよく知らなくて。帰ってきたときに東京の方々が大分に来るってなった時に、東京の人に大分のことを説明ができなくてそれが悔しかったので、子どもが生まれたのをきっかけに、この子を最年少温泉名人にしてやるわーみたいなことをFacebookに書いたところ、ぜひひみたいな感じでウェルカムムードが来て、なんかすごいことをやってしまったなと思ったんですけども、だいたい5ヶ月半ぐらいで最年少温泉名人というのを達成することができました。未だにこの記録は塗り破られていないので、第2子で破りに行きたいなあとというふうに思っています。温泉好きっていうわけではなかったんですけども、寿温泉というゆめタウンの近くにある共同温泉の番台を一部改修しまして、現在こちらは完全ロードのオープンにはなっているんですけど、地域の課題として、共同温泉っていうのはいろんな種類の立ち寄り湯がある中でもいわゆる自分家のお風呂って言われているようなジャンルになります。このお風呂が高齢化であったり文化の変化であったり、そもそも別府には立ち寄り湯が多すぎるみたいのところもあって、経営自体がもう立ち行かないという課題が実はあります。これはどういうことかという、皆さん当たり前目にしている別府の湯煙の景観がなくなる可能性がある、そういうふうに感じていて、私は少しながらでもいいんですけども、どこかしら携わることができないかというふうに思っ

ていて、今現在は番台をオフィススペースとして、電源、Wi-Fi も全部整えて無料で使える「湯ワーキングスペース」として生まれ変わらせるというプロジェクトをプライベートでやっています。これは完全クローズドオープンなので、もし使いたいわーという方がおられれば、駐車場は1台あります、電源、Wi-Fi、あと空調管理もしっかりとできていて、しかもお風呂、一番風呂に入っただけです。全部無料で利用ができるので、もしご興味があれば使ってみていただければなあというふうに思います。

これは豊後大野にある、リアルダッシュ村みたいな感じで村を作ろうって言って取り組んでいる若者がおられるんですけども、その若者たちと共に景観とそして地元のご飯と地元のプレイヤーたちで結婚式を作るというプロジェクトも進んでいます。



大分市内においては、私はまちを遊び場にしたいっていうふうに思っていて、本来私はちっちゃい頃まちに遊びに来た時に、来る時どういう時かという
と、土日のお休みの時に母が連れて来てくれる特別な場所だったんですね。なんですけれども、Uターンし

て帰って来てみたら人通りがすごく減っていたのがめちゃくちゃショックで、どうしたらここを人でいっぱいにすることができるんだろうって悩み悩み悩んでいたところ、まちのキーパーソンの方々に声かけをしていただいて、これは船のところって言われているところですね、まちのアーケードの中に60畳？200畳？全面的に畳を敷いて、コタツを60台出して大忘年会をするみたいなプロジェクトも4年連続で開催いたしました。去年はコロナの関係でなかなか難しかったんですけども、開催をさせていただいて、この後上原さんの話もあるかもしれませんが、まちを遊び場にしたいっていうふうになったときにいろんなところにご挨拶回りしなきゃいけないとかがけっこうあって、申請しなきゃいけないところがたくさんあったりとかするんですが、そういった情報を若い子たちに、次の人たちにバトンタッチできるようなことができないかなっていうのも裏の目標としてあります。

あとは最近「リノベヤ女子部」っていうのを立ち上げていまして、これは今は別府の空き家の一つ、ほぼ無料の状態でお借りしていて、女性たち4人と最近APU生の子たちが結構参加して来ていて、みんなで中を改装して転貸に出せないかっていうような感じのことを取り組もうかなあというふうに思っています。空き家の問題というのはたくさんの課題があるんですけども、その中でも自分の家を貸すということが想像つかないぐらいのオーナーさんが結構おられるので、内装に関しては自分たち手出しでやる代わりに転貸での利益を頂けないかっていう交渉をさせて頂いて、お客様がいたらそのままオーナーさんにお返しするっていうのを実験的に取り組んでいます。あとは「大分移住計画」っていうのを2015年に立ち上げておりまして、先ほど申し上げましたとおり自分がUターンしたときに東京まで情報が届いていなかったのも、どうであれば届けられるんだろうっていうのをディスカッションするコミュニティの場として立ち上げました。これは各地域を知るために、別府であったりとか中津だったり日田だったりとか、いろんなエリアで開催をしています。現在で18市区町村のキーパーソンとなるようなメンバーとある程度のつながりができてきていて、Webメディアも今年度立ち上げまして、「大分移住手帳」っていう、県のお仕事として取り組ませて頂いたんですけども、移住の人たちにフォーカスを当てて、移住のリアルですね、いいことばかりじゃなくて、正直きつかったところとかも全部取り上げて地域のことを知ってもらおうっていうWebメディアを立ち上げて現在更新をしています。

あと取り組んできたこととしては、毎週水曜日500円持ち寄りのコミュニティだったりとかっていうのをやってきました。

仕事の話に少し戻りますけれども、GoogleマイビジネスやInstagramということでも活用セミナーっていうのをやっています。大分市内にあるコックルさんっていう飲食店さんはSNSだけで集客をされていまして、2020年4月にコロナ真っ只中で移転オープンした韓国料理屋さんだったんですけども、InstagramとGoogleマイビジネスだけで売上げが立ちすぎて給付金が貰えなかったっていうぐらい売上げが上がっています。これはちなみに割と最近の予約台帳をいただいたんですけども、左側が前日に日替わりのメニューをインスタにアップしなかった日です、右側がインスタにアップした日。これだけInstagramだけでも集客ができるんだということの本当に良い事例だなあというふうに思っています、これらをぜひ、嘆くだけでなく情報発信がいかに大事なのかといったところを事業者さんに気付いてほしいということで、商業・サービス業振興課の方々とご

一緒させていただきながら 18 市町村でセミナーを開催していますので、もしご興味がある自治体の方がおられましたら、商業・サービス業振興課の方を捕まえていただいて、開催などさせていただければなというふうに思います。ということでご興味があればお声かけいただければなというふうに思います。地域の方々が一人一人意識をして情報発信をしていくというのが非常に大事になってくると思いますので、皆さんがインスタとか SNS とか分からんとかじゃなくて、少しでもやっていけたらいいなと思うので、もしよかったらお声かけください。

○上原 秀雄氏（大分市商工労働観光部おおいた魅力発信局 主査）

大分市役所の上原です。よろしくお願いします。

プライベートな部分も含めて自己紹介をさせていただきます。

なお、会場でお見せしているスライドとオンラインで配信しているスライドは諸事情により一部異なりますのでご容赦願います。

さて、私の市役所でのメイン担当業務は大分市への移住促進ですが、ラグビーワールドカップ開催時は海外向けのプロモーションなどもやっておりました。また、コロナ禍の中では飲食店支援などもやっております。また、私は大分市の魅力発



信の最前線に居るんですけど、ちょっとイタズラ好きの公務員でもありまして、「SARU TABI(さるたび)」という本物の猿を使った大分市の観光 PR 映像を作った時に、プロモーションの一環として実際に猿（主役の菊千代）が大分市長を表敬訪問するというギリギリの企画を実施しました。非常にリスクのある企画であり、実際、市長と菊千代の目が合っ

て菊千代が市長を威嚇するといったハプニングもありましたが、「猿の市長表敬訪問」は

多くのメディアに取り上げられました。こういった、公務員としてやれるギリギリのところを攻めている職員です。

次に移住の促進についてですが、宝島社「田舎暮らしの本」の「住みたい田舎ベストランキング」という企画で大分市は長年ランク外でしたが、「若者が移住したい田舎部門」（人口10万人以上の大きな市）で22位（2019年）→6位（2020年）→2位（2021年）と一気に順位が上がりました。何があったか分かりますか？2018年4月に「おおいた魅力発信局」が設置され私が移住促進の担当になりました。やっぱり大分市の名前を世に出すというのは大事なことです。ちなみに、3月1日号の「市報おおいた」で大分市に移住してきた人から見た大分市の魅力という特集を巻頭6ページに組んでいますのでぜひご覧ください。市HPからでもご覧になれます。

今日も会場には別府の象徴みたいな人が来ていますが、私はベッパでもあります。別府を愛する人のことベッパと私は呼んでいるんですが、私は別府で高校まで育って、両親も別府に住んでいるので別府への愛着はものすごく強いです。別府では例年、40歳の時に「2回目の成人式」という行事を有志で行っているのですが、その実行委員長を務めました。そして、その行事の余剰金で別府市に別府のマスコットキャラである「べっぴよん」をデザインしたマンホールの蓋を寄付しまして、現在も別府トキハ前の歩道に設置されていますので機会があればご覧ください。

次に、私は空手家です。この話をしだすとちょっと長くなるので省略しますが、プレステのソフトに実名で登場しています。

あとは自称「ミスターおもてなし」。仕事上はポルトガル大使ご夫妻やミスインターナショナル各国代表などのVIPが来市した際は私が大分市を案内しました。また、プライベートでも街中で道に迷っている外国人がいれば道案内をしています。彼らからは色んなことを聞かれますが、特に海、山がとても綺麗だねってすごく言われるので、「言われてみたら確かにそうだな」と、逆に大分の魅力を教えてもらうことも多いです。

私は「おおいた魅力発信局」という大分市役所の部署に所属しているんですけど、プライベートでは「おおいた”一人”発信局」として、独自の視点でおおいたの魅力をFacebookなどのSNSに年間2,000件ぐらい投稿しています。「#（ハッシュタグ）ウエハランチ」などを付けて、近辺の美味しい食べ物情報を発信したりしています。

以前は海外や全国にプロモーションをしていたんですけど、今はコロナ禍の中なので、やっぱり市民・県民で地域経済を回す時なんじゃないかなと思って、こういう一人発信局活動をしています。

コロナ禍の現在は地元の良さを知るチャンス

「We♥(ラブ) OITA プロジェクト」。これは何かと言いますと、ラグビーワールドカップの時に大分で実施したおもてなし企画の名前です。当時は今では考えられないぐらい世界中から多くの人が来ました。観光客にとって、旅先での思い出



は現地の人との交流の思い出だと思いましたので、なんとか海外から来た人に良い思い出を作ってあげたいなと一人でずっと考えていまして、そこで始めたのが「We♥OITA プロジェクト」です。これは Welcome to Oita とプリントされたシャツを作って自分で着て、We♥OITA とプリントされたシャツも作って、まちなかで仲良くなった外国人観光客にどんどん着せていくという一人プロジェクトを自費でやっていました。この様子を自分の SNS で投稿・拡散していたら職場の幹部がそれを見て、良いアイデアなので市の事業として実施しようという話になりまして、新たに 200 枚ほど作りました。それからどんどん配ってまちなかが We♥OITA だらけになって、最後の方は「あのシャツはどこで手に入るんだ」という問い合わせが観光案内所に寄せられるという事態になりました。私がシャツを配っている最中、彼らから「海・山も綺麗だけど地域の人たちがみんな優しいよね」ということを何度も言われたのが印象的でした。ちなみに、そのシャツをプレゼントした 2 日後に東京会場で開催されていた日本一南アフリカ戦をテレビで観戦していたら、「あの We♥OITA シャツを着て応援している外国人が映っているぞ!」と友人から連絡がありました。「えっ、そんなこと本当にある?」と思って確認したら間違いなく私が手渡した外

国人観光客の一行が映っていました。これは嬉しかったですね。そうしたら今度はNHK world news から海外ニュースとして放映したいという連絡があり、世界中で3億世帯が視聴可能な番組で、日本の OITA という所で We♥OITA シャツを配っている男がいるということが取り上げられました。その後、地元の大分合同新聞のミニ事件簿でも（あまりミニじゃなかったと思うんですけど）取り上げてもらいました。

次に話題変わりました、コロナ禍の今はピンチなのかチャンスなのかという話です。先ほどもちょっと言いましたけど、遠くに行けないなら地元の良さを知るチャンスですよ。例えば、佐伯市宇目の藤河内溪谷。昨夏、初めて行きましたけど、ものすごく綺麗なところでした。大分にもまだまだいいところがあるなど。あと、大分県をすごく研究した人が作った「大分学」というものがありまして、その人が書いた本、それに対する検定があります。私も受験して中級に認定されました。地元大分県を勉強する良い機会になりました。

次に、コロナ禍の中での活動としては「大分まちべん」という企画がありました。去年の4月、コロナ真っ只中でまちに全く人がいなくなった時ですけど、飲食店を応援するため、ラグビーの時にパブリックビューイングで盛り上がった祝祭の広場でお弁当を売りたいという民間事業者から相談がありました。市役所としては、ちゃんと入札をしたり、所定の手続きを踏んでやろうとしたんですけど、そんなことをしている時間がないと。人件費は要らない、自分たちでやるから、でも広場の使用料が高額なので何とかならないかという話になりました。大分市としては、広場の使用料を全額免除にした前例はなかったんですけど、関係部署と掛け合いました、一定の条件は付けましたが何とかそれを実現しました。その結果、ここで5,757食というお弁当を販売することができました。

この図は「大分まちべん」を実施するにあたり、私が2日間で調整した庁内外の組織と関係団体、マスコミの図です。調整の順番を一つ間違ったらトラブルになるということとはよくありますので、間違いなくこの順番でこの人に話をするっていうのをババッと2日間で調整して、「大分まちべん」という事業をサポートしました。役所はなかなか縦割りなので短時間で前例の無いことを調整するのは非常に難しいんですけど、そこは普段築いている信頼関係で何とか乗り切りました。いつ誰にどの順番で話を持っていくのかっていうのが各地域や商店街とかでもあると思うんですけど、それがわかっている人に相談をすると非常に早く話が進みますよね。

これは後輩たちがやっているイベントの紹介なんですけど、府内5番街商店街の路上で第2・第4木曜日19時から「まちほし」(まちはほしいモノにあふれている)っていう誰でも参加できる路上飲み会をやっています、そこでまちなかの色々な出会いを作っています。寒いんですけども冬時期の今でも意地でやっています、外で。ぜひ近くに来たときは立ち寄ってください。

そして、まちほしの派生企画(スピンオフ)として、祝祭の広場で「オトナのファミコン大会」を企画しまして、私が一人で祝祭の広場と大型ビジョンを貸し切ってスーパーマリオなどのゲームをプレイしました。先週の月曜日にお遊び企画でやったんですけど、友人や通りがかりの高校生も参加してくれて思いのほか盛り上がったので、室内でのイベント開催が難しい昨今、広場の新たな使い方が提案できたかなと思っています。

ここでちょっと仕事の話に戻りますが、今、日本全体、移住とか関係人口という言葉がキーワードになっています。移住は無理でも何とか地方に来て貰うため、テレワークしようとかワーケーションしようとか、東京から地方に移住したら補助金を出しますよ、みたいな国の政策があるんですが、「ちょっと待ってください」と私は言いたい。関係人口創出とかの前に今実際に大分に住んでいる定住人口の中で地域にあまり関心が無かったり、関与していない人達が沢山いるんじゃないかな、と。だから、そういう人たちを巻き込むことの方が先じゃないですかって私は思っています。もっと地元の商店街を歩こう、ネットショッピングで買うんじゃなくてちゃんと現地に行って買おうという人たちを増やす。こっちの方が私は大事だと思っています。ですので、私がプライベートと仕事の両方でやっているのは、まず大分のことをもっと知りましょう、まちに出かけましょう、いろんなことに関わりましょう、という取り組みです。選挙もそうです。投票するから興味を持つんです。興味が無いから投票しないんじゃないかと、投票行為をすることによって選挙や政治に興味を持つようになりますんで、関わるのが大事ですよね。関わったら、もっと大分のことが好きになるはずですよ。そして、今日もそうですけど、We♥OITA仲間が増えます。そうしたら、また仲間に関わりに行くためにまちに出かけていくわけですね。このサイクルを私はなんとか作りたいなと。この流れを作るナッジマン(肘でつついて何かのきっかけを作る人。行動経済学用語の「ナッジ」からの造語)に私はなりたいと思っていますし、あなたもなれます。今日のイベントもそうですけど、色々な機会にそういうことをお話させて頂いています。

まとめになります。今までは「競争」ということで色々と競っていたと思うんですが、これからは一緒に作って行こうという「共創」の時代です。災害時とかの緊急時は色んな人と連絡を取る必要が出てくると思うのですが、やっぱり普段からちゃんと繋がっていてこそいざという時に力を発揮できると思うんですよね。

地域を愛する市民がたくさんいて繋がっている、それこそが大分の魅力。私は多くの観光資源などを調査・研究してきましたけど、結局、地域の魅力っていうのは「人」です。

We♥OITA。私からのメッセージです。ありがとうございました。

○下村 亮介氏（まちづくり雪笹株式会社 代表取締役）

私は下村亮介、まちづくり雪笹株式会社の代表をしております。年齢は今年で48歳、年男でございます。このまちづくり雪笹は、立ち上げる前の前身であるまちづくり協議会の時にした事業、先ほど見ていただきました。去年の7月に会社を本格的に立ち上げさせていただきました。先ほど木藤さんのお話を聞きましたけれども、我々もまちづくり協議会時代に、ちょうどyottenができた、確か内覧会の日に突然お邪魔して、議員さんが内覧をした後に僕たちも入って実際見学をさせていただきましたし、その時にちょっとの間でしたけれどもお話をいただいて、その後木藤さんに杵築に講演会に来ていただきました。木藤さんとのご縁がありまして。我々は油津で言うとアブラツコーヒーができたぐらいのところを進んでいるところでございます。

まちづくり経歴と行って、私ちょっと作ってみました。振り返るためにですね。実は私、18歳までは杵築で過ごします。杵築幼稚園、杵築小学校、杵築中学、杵築高校と。その後大阪に行くんですけども、アルバイトで履歴書を出すところ



このぼっちゃんですかと。私立の幼稚園から入ったんですかみたいな事を言われると、いや違いますと、公立ですよということも言ったこともあります。大学は関西の方に出まし

て、修行を2年間、家業の修行をして、6年間は外の空気を吸いました。ちょうど私が18歳の時にバブルがはじけて、入学をして、私たちは第2次ベビーブームの時代で大学に入るのがかなり難しかったんですけど、出る時にはなんと就職氷河期になっていて、なかなか就職先が決まらなかった友達もいました。その中で6年間、その間杵築に帰ってるんですけども、いざ家業を継ごうと思うと、僕が思っていた子どもの頃の商店街とまったく変わってしまっている現状を見まして愕然とします。え、俺今から帰って商売しようと思ったらこの商店街でするんか、みたいな。子どもの頃の商店街と全然違うやん、みたいなギャップに苦しめられます。

「護町会」を立上げ

帰ってすぐに商工会青年部に入部しまして、同じような場所で商店街の先輩たちと、それから工業も含めてありますのでそんな先輩たちとまちづくりの第一歩を踏み出すわけですね。それから32歳の時に杵築青年会議所に入会しまして、またそこでまちづくりを叩き込まれます。まちづくりというのは多岐に渡りますので、今思うと、この2つの団体に入って先輩や仲間たちとまちづくりをしていく。先ほど皆さんの話にありましたけれども、人がいないとなかなかまちづくりは成り立っていかないということを私は学びました。

そこで、どうしてもこの青年団体というのは卒業があります。横に書いてますけど、商工会青年部は45歳、実はでも私が入ったときは42歳だったんですけども、人がいなくなっていくので卒部の年数が毎年上がっていきます。いずれは50歳が卒部になるんじゃないかなと思ってんですけども。そんな感じでいつか卒業という、辞めるということが来るんですけども、辞めた後に僕はちょっとまちづくりに興味があったので、このまま辞めてしまうのは、社業をするのは大切なんですけど、商店街の寂れていってる姿、良くなりそうな雰囲気もなかったのどうにかしたいな—ということで、まちの若い人たちを集めて39歳の時に「^{ごちょうかい}護町会」という、護る町の会というのを立ち上げさせていただきました。

この護町会っていうのは、商店街に下から上まで5町あって、本当は数字の五にするつもりだったんですけど、護るという字を使って護町会にしようということで活動を始めます。何をしたかっていうと、夜市を始めました。僕らが子どもの頃に夜市が夏の時期にな

るとあったんですけどもうなかったの、まちの若い子から「先輩、夜市復活させませんか」ということを言われて、じゃあそれを復活させようと、護町会を立ち上げようということで、通り会ももうなくなっていたので、普通商店街には通り会っていうのがあるんですけど、我々の商店街には通り会すらもうなかったの、護町会っていう、若者だけでゆるい会を立ち上げて夜市を始めたのが最初です。主に短期的なイベントを作ったり運営をしたりということを行なっています。この後、すぐその次の年に「城下町まちづくり協議会」いうのを設立させていただいています。これは先ほどお見せしたビデオに関わった事業をやっていくわけなんですけれども、短期的なまちづくりばかり見ている、中長期的なまちづくりを視野に入れつつ活動していこうということを一人の杵築市の行政マンの方に言われまして、この出会いは僕の中では大きかったですけれども。そうですね、たしかにそうだなということで、住民を巻き込んで色んな勉強会やワークショップを行ったり、大学や企業等の方々と広く意見を、このまちの課題を掘り下げようということで、アンケート調査を大分大学の生徒さん達と共同で取ったり、あと空き地が、今杵築市の商店街をご存知の方がいるかもわかりませんが、これ商店街？っていうぐらい空き地が多いです。なのでその空き地を活用して何かできないかということで、先ほどお見せした小屋を作ってみたりとか、みんなで住民でワークショップして小屋を作ったり、それを活用していく。それからまた景観も、江戸時代の景観が残っていますが、通学路近辺、それから商店街の谷間になっていますので見上げる竹林があるんですけども、そこももう朽ち果てて竹がいっぱいあったので、景観整備の一環として竹林を綺麗にしようじゃないかっていうボランティア活動なんかもしつつ、それから子どもたちの育成ということでガイド授業もやっています。杵築市と青年会議所で「歴史子ども探検隊」という、子どもたちに我がまちの歴史を教えてあげよう。学校では学べないような事を教えようということで、地元の歴史を教えて、最後試験があるんですけども、先ほどの大分学検定と同じですね、大分学検定みたいな感じで試験をして三つ星を取った子を今度は我が社が、当時はまちづくり協議会でしたけれども、受け入れて、子どもたちにガイドをしてもらう。観光客の皆様にはですね。そういう子どもたちの地域愛の醸成を図るような活動なんかもしています。それから毎月第3土曜日には城下町マルシェをずっとしてきています。3年ぐらいになりますかね。1月と8月以外、暑い時期や寒い時期だけはしませんけれども。実は明日もあります、城下町マルシェ。10時から15時までやります。明日はハロー大分さんが取材に、生中継入るそうなので、今「ひいなめぐり杵築」をしていますの

で、ひいなめぐり方々、もし良ければお足を運んでいただければ、杵築のおいしい食べ物とかかわいい小物等のマルシェをしたいというふうに思っておりますのでよろしくお願い致します。

それから46歳の時に、まちづくり協議会ですからまちづくりの協議をしていくわけで、机上の論理ばかりやってもしょうがないので、今度は会社に移行しようという思いはもう最初の頃からあったので、46歳の時にまちづくり雪笹株式会社を設立しました。3名の出資者、1人50万ずつを出し合っただけの会社を設立させていただきました。私と、ずっと私と一緒に護町会、まちづくり協議会を一緒にしてもらっている副会長であります神田さんと、当時監事をしていただいた議員でもある藤本さんという方と3名で会社を立ち上げて、今までまちづくりに携わって来てくれた方々を「与力」という形の呼び方、城下町らしいなって皆さんから言われるんですけども、力を与えると、与力ですね、与力という役職が昔江戸時代にはあったそうですが、その与力という形で出資はしないけども応援する、油津でいうと油津応援団みたいな感じですね、というような形を迎え入れて今やっています。まちの駅「増田屋」ということで今建設をしています。ちょっと見てください。もうみんな知ってますね、これ、杵築の人。綾部味噌さんの隣に酢屋の坂っていう有名な坂があるんですけども、当時その隣は駐車場になっていて、草も生えたりとかで車が普通に停まっていたりとかする空き地だったんですけども、その真横に2階建ての和風建築、隣の綾部味噌さんの建物の邪魔にならないようにですね、この景観に似合うようなものを今作っています。この1階には3区画、フィンガーフードの店とチャレンジショップと農産物の直売所、2階には宿泊施設、主に家族やグループ向け、それからレンタルスペースということで、教室とか集会なんかに使っていただくような。このへんも先ほど木藤さん話の中にあっただようなことをやろうと思っています。なんでこうなっているのかというと、まちづくり協議会時代にとったアンケート、住民の意見を全部反映しています。景観はすごくいい、城下町があっというんやけど、遊ぶところやちょっと食べるところがないよなあとか、お土産ちょっと持って帰れるところがないよなあとか、泊まるところがないよなあとかいう部分を全て集めるところが欲しいなあというのを全部この中に詰め込んでいます。そういうものをまず作ってまちの拠点をつくりたいなあという思いで今頑張っている最中でございます。4月にオープン予定ですので、城下町を見学した後に坂を下っていただいて、おにぎり綾部味噌の味噌汁を出しますので、お味噌汁を飲んで着付けを満喫して帰ってください。

○和氣 日向氏（ゲストハウス白杵家 女将・白杵市中央通り商店街振興組合 理事）

こんにちは。はじめまして。和氣日向と申します。今日は白杵市からやってまいりました。4年前に東京からこちらに移住してきました。現在はゲストハウス白杵家という宿を営んでおります。また、縁あって2年前から白杵市中央通り商店街の理事も務めております。

本日は白杵家の女将として、また商店街の理事として、また移住者として、皆様といろいろお話できたらと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。



（セミナー当日の
Yahoo!トップに和氣さん

のインタビュー記事が掲載されたことを受けて）これが、「18歳で移住、下北女子、今女将」っていう、斉藤由貴、ダルビッシュ、その上に上がっているのを記念すべきときだったのでスクショしました。ぜひ読んでいただけたら嬉しいです。

簡単に私が白杵に来る前までのプロフィールをまとめてみました。ちょっと字が多くて見づらくもしいないんですけど、説明させていただきます。

白杵に来る前と言っても私学生だったので、主に学生時代何していたかということになるんですけども、まず1998年、東京都の下北沢というまちで生まれます。下北沢は世田谷区にあるまちなんですけども、演劇のまちとしてもよく知られていて、若者も多く集まる大人気のスポットです。ちなみに、白杵にもございます私の父が作った「農民カフェ」というお店の本店がこの下北沢にありますので、下北沢を訪れた際にはぜひ立ち寄ってみてください。

幼稚園はインターナショナルスクールに通っておりまして、日本語よりも先に英語ですべて家族と会話をしていました。白杵に来る前の私をひと言で言うなら、英語かぶれとい

う表現が適切だと思います。中学時代は英語の世田谷区の弁論大会で優勝をして、高校生
の時は夢だった留学を叶えることができました。総務省の「KAKEHASHI PROJECT」と
いうプロジェクトと文科省の「トビタテ」という留学プロジェクトで2回ほど渡米をしま
した。どちらもクールジャパンを伝える任務を持って現地の学校とかに行ってクールジャ
パンプレゼンテーションするというプロジェクトだったんですけども、だいたいほぼ英
語、英語、英語三昧で、いずれは英語関係の職にでもつくのだろうとぼんやり考えていた
んですけども、高校2年生の時に大きな転機が訪れます。それがこちらにも書いてありま
す、4月、高校2年生、和氣家、白杵市へ移住とありますが、私の家族が白杵市移住を決
めました。というよりも決めてすぐしました。私の家族の場合は白杵へ移住というより東
京から脱出という表現が正しいかもしれないですが、私の父の本業がミュージシャンで、
また先ほども紹介しました農民カフェ、飲食店を運営しながら千葉県の方で通いで米作り
もしていました。本格的に農業をしたいという気持ちもあり白杵へ移住したようです。で
すが一方私はまだ高校2年生で学業が残っていたため、下北沢の農民カフェに一人移り住
み、高校卒業まで一人暮らしをしておりました。ちなみに農民カフェは古民家カフェです
ので、住む分には大丈夫な場所でした。

人生終わるといふ気持ちなくらい爆発寸前

この時はまさか自分が白杵に行くと思ってもいなかったんですけども、あっという間
に時間が過ぎていよいよ進路のことを考えなくちゃいけないという時になって、いろいろ
いろいろ悩んで、白杵へ移住を決めました。一つは、進学してまでは学びたいことが見
つけられなかったことと、東京でアルバイトをしながらでは生活に追われてやりたいこと
を見つけられないと思ったからです。白杵に移住をしてそこでゲストハウスを開業して、き
っと大きな可能性があると思っていてやってきました。ただ当時18歳ですね、卒業式で泣く
暇もなくすぐジェットスターに乗って白杵の方に来たので、18歳の都会育ちが住む場所
ではないということに行ってから気がつきました。これまで私は、生まれ育った下北沢も含
め、渋谷や新宿で友達とめっちゃめっちゃ遊びまくってた毎日でした。でも白杵には友達が
いない、そして遊び場がないっていう、地獄でしたね。家と宿と往復の毎日。友達もい
ないので会話するのは家族だけ。すっごい寂しい日々でした。もう月日が経つにつれてその
寂しさが憂鬱に変わって、ここにはいられない、もうこのままだと自分の人生終わるとい

気持ちなくらい爆発寸前でした。でも、ここで衝撃的な出会いがありました。それが商店まちの皆さんとの出会いです。今私が理事を務めている中央通り商店街の皆さんです。このエピソードはちょっと詳しく話させてください。



スライドの方に商店街青年部とありますが、一応念のためお伝えすると、青年部は商店街の企画・実行を行う組織のことで、毎年11月に白杵では竹宵という大きなお祭りがあります。1ヶ月前から竹宵の準備を商店街で行うのですが、私が青年部の皆さんと

出会ったのはこの準備の時でした。私の家族は東京に移り住んでからもこの商店街で農民カフェを営んでおります。その日は父が準備に参加できず、私が代わりに行くことになりました。青年部の方とは、私が高校生の時に何度か白杵に帰省をしていたので顔を合わせただけはあったんですけども、ちゃんと話したのはその日が初めてでした。もうすごい緊張して、今まで話したこともないし、ましてや白杵の人とちゃんと会話するの初めてだなんていうくらいだったので、大丈夫かなあと思いながらその準備の現場に向かったんですけども、商店街の皆さんは「あ、日向ちゃんやな、こっちおいで、今日こういうことをやるよ」というふうに優しく迎えてくださいました。竹宵の作業をして、もう終わったから帰ろうと思ったときにまた呼び止められて、「日向ちゃんまだ帰っちゃダメで。鍋一緒に食べるから」というふうに呼び止められました。で、一緒になる鍋を食べました。白杵に来て今まで、まず白杵の人とちゃんと話したこともなかったし、まして一緒に食事をしたこともなかったので、すごい嬉しいっていう気持ちでいっぱいになりました。その日から準備がある日は毎回顔を出して、青年部の人とおしゃべりして準備して最後に鍋を食べてってってというふうに、準備の日を毎日毎日楽しみにしていました。会う回数を重ねていくうちにどんどん青年部の方とも仲良くなり、青年部の皆さんが私の初めての白杵の友達になりました。今まで愛着が全然わかなかった白杵も、青年部の皆さんを通して愛を感じられるようになってきていました。

白杵って結構楽しい場所じゃんっていうふうに気付き始めた時にまた新たなる出会いがありました。それが白杵のスナックです。青年部の方に連れられて初めてスナックデビューしたんですけども、あの感動を二度と忘れないと思います。私、昭和歌謡がすごい好きなんです。昭和の銀幕スターとかそういう映画とかも大好きなんですけども、逆に私の同級生とあんまり話が合わないの、この白杵の地元の方と「あの俳優いいよね、あの曲いいよね」って言いながらお酒を飲んで、「じゃあちょっと1曲一緒に歌おうか」って言ってデュエットしたりするのはもう東京じゃ叶えられなかったなって思うぐらいまさに天国に近い場所でした。スナックに通い始めたことで友達も激増して、白杵ライフが一気に楽しくなっていました。白杵のスナックに関しては魅力を語ると止まらないので、ぜひそこは私の宿に泊まっていたいただいて私をご案内させて頂ければと思います。

白杵の魅力に気付かされてからというもの、嬉しいことにいろんなことに参加させていただきました。まず、一番上に書いてあります白杵市公式移住ポスター参加、これは写真の一番左側ですね、こちらは私が移住して1年の時に、先ほども上原さんのスライドに出ていましたけれども、宝島社が出版する「田舎暮らしの本」で、白杵市が移住したい田舎ベストランキングの全国第3位を飾りました。また、若者部門では1位を飾ったということもあり、若者代表としてこのポスターに参加させていただくことになりました。このポスターがまちじゅうに貼られて、あなたポスターの子でしょうみたいな感じで声をかけていただくことも多くなりました。続いて、白杵市中央通り商店街理事就任です。この理事のお誘いが来た時はすごい嬉しかったです。またその下にありますが、夜市の実行委員長も就任した年に努めさせていただきました。就任した本当にその年だったのでいきなり実行委員長というのはすごい大変だったんですけども、商店街の皆さんがいろいろサポートしてくださって無事大盛況のうちに終えることができました。夜市は商店街公認の夜遊び場というふうに私は言ってるんですけども、白杵は現役でそのままずっと夜市をやり続けています。この夜市は白杵では6月に行われますので、ぜひぜひ遊びに来てください。

最後に、学生団体と白杵市のコラボマガジン制作をお手伝いさせていただきました。こちらは写真の一番右ですね。白杵マガジンと英語で書いてあります。これは中学の同級生が大学で地方創生・活性化を趣旨とする「HANDS&FEET」という学生団体のリーダーを務めております。私をきっかけに白杵市に興味を持ってくれて、実際に遊びに来てくれて、白杵面白いねっていうふうにとんどんはまっていきました。二人で話していくうちに、「白杵の魅力ってやっぱり人だよ。よく観光って言えば石仏とか二王座とかいろいろ

ろ出てくるんですけどやっぱ人じゃない？」っていうところになって、その雑誌作りた
いよねっていう話から白杵市とコラボという形でマガジンを制作することとなりました。
こちらが日々の白杵での私の交流の様子ですね。ちなみに一番左が白杵に来るちょっと前
くらいの私です。オシャレで坊主にしてたんですけど、それも Yahoo!の記事に載ってま
す。本当にこの状態で学校の卒業式に出て、そのまま白杵に来ました。こんな奇抜な私を
受け入れてくれた白杵の皆さんに感謝しています。その下にある、私がマイクを持って喋
っている、これは夜市の写真です。で一番右上、私が自撮りで撮っているのは、商店街の
皆さんと焼き肉を食べている時の写真です。一番右下は一緒に外国人の方と肩を組んでる
んですけども、こちらが一昨年ラグビーワールドカップの時にイングランドとフランスの
元代表選手がうちの農民カフェの方に遊びに来てくださってその時に撮ったものになりま
す。

最後になりますが、本当に最初は嫌いで嫌いで仕方なかった白杵だったんですけども、
商店街の青年部の皆さんをはじめとした白杵の人を通して白杵ラブになりました。白杵の
一番の魅力は人だと思っています。私もそのうちの一人になれるようにこれからも活動
していきたいです。改めまして本日はどうぞよろしく申し上げます。女将や理事と名乗り
ながらもまだまだ勉強中なので、私なりに今日は皆さんとお話できたらと思います。

地域のつながりはすごい大事、そして物理だけでは
ない部分での横の繋がりや若い世代がしっかり育っ
ていくのが必要

○木藤

今日はあまり意見交換の時間がないので駆け足になるんですけども、一通り皆さんの
自己紹介をお伺いしてすごいなあと思ったのは、4人ともまちとのかかわりの立場が違
うんですね。簡単に言うと、下村さんは完全に商店街で生まれ商店街で育ち、一旦離れはし
たけれども家業を注がれながらまちづくりと関わっている。河野さんは大分市内の方です
けど、外に出て外でも働いて、今はお子さんもいらっしゃって、Uターンで帰ってきたと

いうタイプですよ。上原さんはすれすれに行く行政の人ですよ。和氣さんはご両親のきっかけはあるけれども外から関わっているという。



多分まちっていうのはいろんな方が関わるとか、油津の場合も私自身はよそからですし、地域の人たちもいたし、住んでもないけれども周りから関わる人とかって、いろんな応援団みたいな人がたくさんいて、そうした人たちがきっかけを作ったりしてるのかなって

いうふうにごく感じました。

とはいえこんなに世代が違うんですよ。だいたい男3人は近い世代ですよ、40代。女性お二人はまだ若い方だと思んですけど、なんかこんな和氣さんみたいな子が商店街とかああいうのに興味持つとかってどう思います？

○上原

APUの学生とか今日も何人か来てくれてるんですけど、同世代の子に「今日来る和氣さん22だよ」って言ったら「えー」って言って。SNSとかああいう力もあるんですけど、やっぱり社長って言ったら60歳とかのイメージだったのが、もう全然学生でも起業できるし、今回はYahoo!トップという看板を引っ下げながらこの格好で現れるという。頼もしいですね。こういう人が移住者としてまちをちょっといい意味でかき混ぜてくれて、でさっきの話じゃないですけど、きっかけを作ったら動く人って地域結構いるので、そういうものの着火剤になってくれてるんだなって非常に感謝しています。

○木藤

下村さんも、僕ほぼ同じ世代なんですけど、僕も来年年男なんですけど、やっぱり僕らからしたら一旦まちを離れた時とかは杵築なんてもう二度と戻ってくるかぐらいの感覚があったじゃないですか。当時みんな東京に出る、関西に出るみたいな。その中でやっぱり地元って、ようやくとたどり着いてこういうところに来たかなって気がするんですけど、彼女達を見てると最初からダイレクトにそこに来てるって凄くないですか。何か変化が起きたと思います？

○下村

意外と都会の方のほうが田舎に興味があるのかなって逆に思ってた、僕の子どもが小学生5年生なんですけども、僕もそうだったんだけどやっぱり東京大阪福岡には憧れみたいなのがあって、僕はそれはいいと思ってるんですよ。ただ、息子や娘が外に出るときに、帰ってきてほしいというよりも帰ってくる場所を作ってあげるのが僕らの今からの役目なんだろうなあと思ってます。和氣さんのように来たいって言う方々を受け入れる土壌を地域の商店街であったり行政・地域がウエルカム状況になっておくことがこれからの地方の生き残れるというか活気を生むかどうかって、まちづくりの観点から言うとそこが重要なかなあと思ってます。

○木藤

河野さんなんて仕事上はバリバリ IT とか、実体がない部分じゃないけどそういう世界で生きてきた中で今活動の中心でやってるってことでウエットじゃないですか。そこはギャップなのか、つながっているものなのかって、そのあたりでどんな感覚なんですか。

○河野



10年前に会社を立ち上げたときに、まちなかの会社の門をドンドンと叩いて、「私はこういうふうに情報発信したいんです」みたいなプレゼンテーション、営業というか、「こんなに魅力があるのになんでインターネットに情報がないんですか」みたいな熱量で訴え

かけたらもうガラガラガラ（門を閉じる）みたいな感じだったんですよ。やっぱりまちなかの人たちに振り抜いてもらうためには自分が動かないといけないなあみたいな感じの気持ちが強かったというのは大きいなと思っていて。まちなかの商店街でいろんなキーパーソンをされていらっしゃる、まちなかで何か動かすってなった時もこの人を通せば大丈夫みたいな方々にたまたまご縁があってポンポンンってお話を進めることができ。私はどちらかという田舎って世界の9割の田舎っていうふうに使われている中で、東京で同じことをしても正直埋もれちゃうんですよ。それが地方だとお山の大将になるつもりはないけれども目立つ、そしてわりとメディアも取り上げてくれて、どっちかという地方の方がちょろくない？というぐらいに思っていて。今となっては結果論でしかないんですけども、地方の方がやりやすいやんっていうのが今の感想ですね。まちなか50代60代の方々とかも、なんか昔と違って結構下りてきてくれるんですよ。何かやってよみたいな、プレイヤーを募集してるみたいな感じだったりするので、10代、20代の方々とかももし何かやりたいって思ったら、いい大人達が今はいらっしゃるんで、捕まえて、これどうしたらいいですかって言って。バカな発言して許されるのってやっぱり若いうちかなと思うので、ぜひひっ捕まえてもらえたらなあというふうに思います。

○木藤

そうですね。何か僕と下村さんってやっぱりまだ昭和の香りが残ってて。下村さんのプレゼン見ました？全部漢字じゃないですか。護町会とか与力とか、江戸時代ですよ。中

高生のときバブルが弾けて、それまではすごい経済が良くて日本って成長をしてたんだけど一気に、2004年が人口がピークだって言われてますけどその後僕らは落ちていく中で大人になってきて、なんかこう変わっていきなきゃいけないっていうふうに僕らもジレンマを感じてたけどなかなか変えきれずに、40代ぐらいになってやっと面白いことできたかなぐらいのときに、ポーンと先に行く感じで20代がそんなことをし始めると、よく言えば僕らがやってきたことがやっところらに届いたんだみたいな感動を覚えたりしましたし、森さん問題とかもそうですけど、いろんな形で世代交代をしていきなきゃいけない中でそういうものがどんどん生まれているなんて気がしますよね。

○上原

頼もしいですね。今日この会場にも地域のキーマンの方たち、応援してくれてる方が何人か来られて、すごくやりやすいし逆に私たちもこの世代を応援してあげていきたい。私が二十歳の頃とか大山倍達先生の本を読んでどうやって世界最強になるかなとかそれしか考えてなかったですよ。自分で起業してとか、女将とか、商店街に入ってとか、まさか。彼女がとんがってるっていうのもあるんですけど、結構いるんですよ、そういう人が。日本の将来明るいなっていう。問題は大きいんですけど、いろんな人が言ってますけど結局は人なんです。企業を呼ぶにしても移住先を決めるにしても商店街でやるにしても結局人なので、人が育ってるっていうのは私も刺激をもらえますし応援してあげたいなっていうのを感じますよね。

○河野

私一人応援したい子がいるんですよ。今APUの2年生で、APUって今オンラインで授業をされているので正直どこに住んでもいいけれども亀川エリアに固まってるみたいな感じなので、学生たちがもっと点々とできたらいいなということで今いろんな空き家を探してもらってます。なのでもし今日ご来場の方でもし空き家について詳しいよ自分、みたいな方がおられたら声をかけてもらいたいなと思います。

○木藤

昔は田舎のまちって商店街の人たちになりいちいち話を通さないと何もできないしっていうめんどくさいまちだった時代もあると思うんです。今もそういう仕組みがあるのかもしれないですけど、だからもうそんなまちやめてもっと暮らしやすい都会に出ようよっていう若者がいたけど、やっぱ本当にやりたいことをやるためにそういう場所でこんなことしてみたいと思っている子たちがいて、我々の世代ももしかしたら少しずつ地ならしをしてきたのかもしれないし、それが今、地がならされているからこそ若い子たちもどんどん羽ばたくようになってきたしって。20代から我々40代とかさらに先輩方を含めてもっともっと情報交換、交流しながら一つになっていくというのはすごい大事かなと思ってまして。

人材育成とか横のつながりを生んでいこうっていうのが今日のセミナーのテーマだと、課長さんとかからもお話を聞いたんですけど、やっぱり今までっていうのは、まちというのはそれぞれ物理的に離れているのでそれぞれにコミュニティがあって、商店街っていうのは一つの通りが組合になっていたりで物理的なつながりが強かったと思うんですけど、今こういうふういろんなものが発達して物理がなくても簡単にいろんなもので情報交換ができたりとかっていうこともできるようになってきたので、もちろんその地域地域のつながりというのはすごい大事ですし、さらにそれを超えて横でつながることもやりやすくなってきていると。そこは上手に今からハイブリッドで使いながら、杵築のいいところを臼杵も真似しなきゃいけないし逆もあるし、大分市という中心部が逆に地方の何かを学ばなきゃいけないしみたいな、そういういろんな交流がもっともっと生まれるべきかなという気がしているので、私も県の方にはそうやって横のつながりをもっと、特に大分県内は大分市、別府市みたいな大きなまちから小さな離島まで含めていろんな動きがあるので、そこそこに必ずプレイヤーというか色々動ける人たちがいるので、そういうたちが横につながっていくっていうことがすごく大事かな、物理だけではない部分での横の繋がり、そしてその中でこういう若い世代がしっかり育っていくのが必要なのかなと思います。今回は実は4人も、下村さんは結構古くからの付き合いですけど私も初めての方もいて、つながれたなっていうのはすごく良いですし、今日はWebでも配信してますのでそういうところで見てる県内の方とか、今日は県内だけじゃない方も見ているので、何かうまくつながっていきけるようなプラットフォームを県の方も一緒になって作っていったらいいのかななんて。

○質問者

すごくワクワクする話だなーってお話を聞いていて思いました。僕神奈川県出身で、今別府の山の上にある APU っていう大学の学生なんですけど、別府に来てめちゃくちゃ良い意味で裏切られたのが、別府でいろいろ活動してる人たちとかこういう場所にいる人たちってすごい楽しそうなんです。その楽しい感じが、じゃあ僕も何か楽しいことをやってみたいなあと思えるっていうか、そういう姿を見て自分も何かワクワクじゃないですけど面白いことをやってみたいなと思って今僕もいろいろ模索中なんですけど、いろいろ越えなきゃいけない壁とか現実問題あると思うんですけど、そういったところも先にこういうふうに活動されている方とか今日この会場に来られている方の話を聞いて、じゃあどうやったら解決できるかなーとかどうやったらもっと何か面白い事出来るかなーとか、そういう前向きな話っていうのをすごく聞けたので今日はすごく良かったなと思っています。ありがとうございます。

○木藤

テーマであるいろんな交流だとか、これをきっかけに何かいろんなものが動き出す、特に商業再生とが商店街とかいうのがちょっとテーマにはなりましたが、その分野だけじゃなくていろんなものがまちなかでは動いてますし、これからコロナみたいなものってどう考えていくかって、ゼロから考えていかないところがいっぱいあるので、みんなで力合わせてっていうところだと思います。今日はどうもありがとうございました。

